

# 映像資料と社会調査方法

—初期テレビ・ドキュメンタリー『日本の素顔』の取材対象と方法—

武田尚子

## 1 はじめに

### (1) 社会調査方法史における映像資料の位置づけ

本稿の目的は、社会調査方法史の視点から、映像アーカイブ資料の意義を考察することである。社会学の分野では2004年に社会調査士資格制度が始まり、資格制度参加校においては認定科目が整備され、標準化が進んだ。社会調査方法に対する関心の高まりとともに、過去の社会調査の意義を再考する動きが活発化した。社会調査という行為の意味を再帰的にとらえることの重要性が認識されるようになった。

社会調査方法の視点から、過去の調査の行為を評価する際に、課題の一つとなるのが映像資料の取り扱いである。後藤は「ビジュアル素材」として写真、ビデオ、映画、TV番組、絵画、彫刻、ポスター、イラスト、スケッチ、マンガ、絵はがき、建築物、景観を挙げている。とくにフィールドにおける調査実践の成果として一般的なものは写真やビデオである〔後藤 2010〕。後藤によれば、「広い意味でのビジュアル・メソッドは、従来の社会調査ないし社会学の研究では軽視されてきた」〔後藤 2010: 186-187〕。

ただ、社会調査において、映像資料を用いる試みは早い時期からなかったわけではない。1918～20年に実施された「月島調査」は、日本で最初の総合的な都市社会調査であるが、1921年5月刊行の調査報告書には、写真90枚、社会地図27図が付され、調査班が「図示化・図像化」に高い関心をいただいていたことがうかがわれる〔武田 2009〕。しかし、機材や技術の制約から、映像データの作成が一般化するまで長期間を要した。

このような状況と関連して、過去の映像資料が、社会調査方法上、どのような意義を有するかという検討もこれまで充分になされてきたとは言い難い。

だが、社会調査方法史において、「図示化・図像化」されたものが軽視されてきたわけではない。佐藤は「忘れられたテキスト」として、近現代の〈繁盛記〉〈都市下層ルポルタージュ〉〈考現学〉を取り上げ、「調査者／被調査者」「見るもの／見られるもの」「記すもの／記されるもの」について論じている〔佐藤 2011〕。とくに考現学では今和次郎らが試みた図像化・図表化によって生じた視覚経験の変化に言及し、「スケッチ力の裏付けをもつ図化という記述法が、観察に新しい質をつくりあげている」と評価している〔佐藤 2011: 54〕。「視覚化への試み」は、「観察」行為の可能性を広げ、深める。どのような契機によって、新たな地平線をのぞむ「視覚化への試み」が生まれてくるのだろうか。

石田は総合的見地から映像社会学の扱う範囲が、方法・対象・実践の3領域にまたがることを指摘し、映像社会学における実践とは「論文のみを研究成果とするのではなく、〈映像そのもの〉も

また研究成果と考え、研究実践として映像制作を行う」ことであると述べている〔石田 2009 : 11〕。これに倣って、実践の成果である映像制作を包括的な視点でとらえるならば、研究という意識で制作されたわけではない映像資料についても、社会調査方法の視点から、学ぶべき点を抽出することには意味があろう。映画や TV 番組が文化的構築物であることを念頭に置きつつ、今後の社会調査の発展のために、摂取すべき点が那邊にあるかを本稿では考えてみたい。

過去の映像資料を検討する際に、制約条件となるのが資料参照の利便性である。商業映画は不特定多数の者のアクセスが容易であるため、内容分析に用いられる頻度が高い。これに比して、録画技術が普及する以前の TV 番組は、特定の者しかアクセスできず、制約条件が大きい。このような状況も、社会調査方法史上に映像資料を位置づけることを遅らせる要因になっているといえよう。とはいえ、近年はこのような状況を打開する動きがあり、研究者にアクセスの機会が提供されるようになった。本稿では、「NHK アーカイブス学術利用トライアル研究」の機会を活用し、過去の NHK 番組について、社会調査方法史の視点から学ぶべき点や、映像アーカイブ資料の意義を考察する。

## (2) 本稿の映像資料

本稿で考察する映像資料は、1957～64年にNHKで制作されたドキュメンタリー・シリーズ『日本の素顔』である。日本におけるテレビ放送は1953年に開始したが、このシリーズはその4年後に始まり、テレビ・ドキュメンタリーの嚆矢として著名な番組である。毎週日曜日の午後9時30分から10時まで放映された30分番組で、1957年11月10日から、1964年4月5日まで306回分が制作・放映された。そのなかには水俣病の実態を先駆的に報じたことで知られる「奇病のかけに」（1959年11月29日放送）、ヤクザの世界にカメラを入れた「日本人と次郎長」（1958年1月5日放送）などがある。『日本の素顔』という番組名は、担当ディレクターの一人であった吉田直哉の命名によるものである。吉田は『日本の素顔』制作の方向性を導き、放映を軌道にのせた主要ディレクターである。『日本の素顔』に関する著述も多い。本稿では吉田の著述も参照しつつ、この番組シリーズの意義を考察する。

この番組が始まる前年、1956年の『経済白書』は「もはや戦後ではない」と記した。1960年には池田内閣の所得倍増計画が発表された。つまり、日本が高度経済成長へとテイクオフしていく時期に、このシリーズは制作・放映された。50年代後半から60年代前半は、産業間・企業間の賃金格差が拡大し、高度成長から取り残される低所得者が多く生み出された時期でもある。このシリーズにも、「もはや戦後ではない」「所得倍増計画」の語がしばしば登場するが、日本社会の「素顔」に迫ることを意図したこの番組は、これらの語と社会の実態が乖離していることを描き出す（後述）。

「高度成長へのテイクオフの時期」という時代的特徴は、次のような技術的特徴と連動する。この番組が始まった当時、NHKにカメラの台数は少なかった。カメラの使用はニュース番組が優先で、『日本の素顔』スタッフは、麻布に住む外国人から1日3千円でカメラを借りてきた。16ミリのゼンマイカメラで、35秒でゼンマイがほどけてしまうため、35秒以上のカットは撮れない。撮

影のカメラマンも不足し、民間からカメラマンをリクルートした。しかし、スチールカメラのアシスタント程度の経験しかなく、三脚をきちんと立てることもできず、素人同然だった（第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会1」）。このように、機材、人材、制作方法、技術などすべてが発展途上だった。

しかし、新しい技術は、新たな「視覚化」の可能性を切り拓く。当時まだ貴重だった撮影カメラを通して、とらえていったものは何か。都市・地方間の格差、職業間の格差が広がり、日本社会が再編成されていく時期に、撮影カメラを通して、「観察」行為はどのような可能性を生み出していたのだろうか。「技術」と「調査方法」は車の両輪のように噛み合い展開する。「技術」と「見るもの／見られるもの」は関連している。『日本の素顔』に焦点をあてることは、高度経済成長期の初期かつ撮影カメラの導入初期、つまり経済と技術の成長期に、カメラによる「社会観察」が「視覚化」の可能性をどのように広げたかを探る意味をもつ。『日本の素顔』制作者たちは、「社会調査」として制作したわけではないが、『日本の素顔』を題材に、「技術」と「社会観察」、「見るもの／見られるもの」の関連を考察することは意味があろう。

### (3) 「技術」と「社会観察」「社会調査」—宮本常一の映像への関心

ここで同時代の「技術」と「社会観察」、「見るもの／見られるもの」をめぐる興味深い事例を一つ挙げておきたい。それは「宮本常一の写真」である。宮本常一はカメラの利便性が向上した1960年以降さかんに写真を取りはじめ、10万点近くの記録写真を残した。

宮本常一の写真への関心について、佐野は次のように述べている。宮本は渋谷敬三のアチック・ミュージアムに入った戦前に、すでに写真撮影に関心を示し、一定数の写真を蓄積していた。しかし、戦争中に堺市の空襲でそれらを失ってしまった。宮本が再び写真を撮りはじめたのは、八学会連合の調査が始まった1950年代である。対馬調査にカメラを持参したが、1950年代の撮影枚数は多くはない。撮影枚数が増えたのは、1960年に1本のフィルムで72カット撮れるオリンパスのカメラを入手して以降である〔佐野 2003, 2004〕。このように宮本の撮影活動が活発になったのは、機器の利便性が向上した高度成長期で、『日本の素顔』制作の時期と一致する。

宮本は「忘れてはいけない」ものに向けて、メモを取るような感覚でシャッターを切った。「ここにかかげる写真は一見して何でもないつまらぬものが多い。家をとったり、山の杉林をとったり、田や畑をとったり。しかし私にはそれが面白いのである。そこには人間のいとなみがある」〔宮本 1967〕。このように宮本がカメラにおさめたのは庶民の日常生活である。眼前の風景・光景に、その土地の人々の社会関係・社会生活を読みこみ、それを視覚的に保存するためにシャッターを切った。

宮本は「日本社会とはいかなるものか」を探る旅にカメラを同伴し、レンズを通して「社会関係」「社会生活」の記録を蓄積した。生涯、カメラを手放すことなく、10万枚に達したという事実は、宮本が映像に何らかの可能性・期待を抱いていたことを物語る。類いまれなフィールドワーカーである宮本にとっても、カメラは「調査のモチベーションを喚起するツール」であり、「社会観察を深めるツール」として有効であったと言えるだろう。

宮本はカメラを通して、表面的には転変する社会の根底にある本質的なものを見つめようとした。自分が見た日本社会とはいかなるものであるかを他者に伝達し、認識を共有するツールとして、宮本が写真に注いだ執念は、映像の可能性を物語る。庶民、常民の生活の根底にある本質的なものを視覚的にも残そうとしたのである。

また、宮本の例は、機器の汎用性・利便性の向上が、調査動機を刺激し、調査への関心をひろげ、調査行為を深めてゆく再帰的效果を持つことを示している。「調査」「技術」「時代」のダイナミックな連関を感じとることができる。

## 2 発想のルーツ

### (1) 制作体制

『日本の素顔』306回のサブタイトルは表1（論文末尾に掲載）の通りである。制作は4班で構成され、1週分ずつ担当した。東京に3班、大阪局に1班あった。1名ないし2名のディレクターが各回を担当し、4週に1度の割合で担当が回ってきた。7年間で32名のディレクター名を確認できる。異動・配属転換があるので、常時配属されていたディレクターは4名程度である。

表2（論文末尾に掲載）は、制作内容について、武田が分類したものである。高度成長期に急速に発展・伸長しつつある産業や領域も取材対象になっているが、『日本の素顔』の大きな特徴は、成長から取り残されつつある層の生活に積極的に焦点を当てていることである。本稿の分類項目を用いると、地域格差、漁業・漁村、炭鉱、鉱山、貧困、差別、病気、エスニシティ、公害、社会福祉、子ども、土地、農業・農村、独自集団、民俗、慣行、労働、伝統、移民、災害の各項目に、底辺層の生活や、独自の慣習を残す集団に積極的に迫ったものがみられる。

シリーズ全体を俯瞰すると、日本の経済成長の初期に、共時的に発生していた「発展」と「貧困」の実態、つまり格差の実態を、集中的に映像に残している点に、『日本の素顔』の映像資料としての意義の一つがあるといえよう。

『日本の素顔』にみられる社会の底辺層へのまなざしは、どのような発想、技術、方法に基づいて生み出されていたのだろうか。主要なディレクターの一人であった吉田直哉の著述、インタビュー記録、座談会記録からこの点を探ってみたい。

### (2) 発想のルーツ

吉田直哉はその著述の中で、

日本ではじめてのテレビドキュメンタリー・シリーズは、テレビ放送開始の年から4年のちの1957年にはじまった、NHKの番組「日本の素顔」だということになっております。その定説にまちがいはありません。

最初から「ドキュメンタリー」と銘うったわけではなくて、はじめは「フィルム構成」と名乗っていたのだ、といういまはもう誰からも忘れられている事実があります。

私はその「日本の素顔」の第一回からの担当で、そして番組の命名者ですから責任をもって証言できるのですが、肩書を「フィルム構成」としたのは、少なくとも三つ、四つの

理由がありました。

と述べている〔吉田 1994 : 186〕。自他ともに認める『日本の素顔』制作を牽引したディレクターの一人である。1954年にNHKに入局し、当初はラジオ番組の制作担当だった。1957年、『日本の素顔』の開始時に担当者の一人になった。『日本の素顔』というタイトル名は、考えに考えて、70数本めで採用になったタイトルだった（第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会2」）。1963年にドラマ制作に異動し、大河ドラマのヒット作を複数生み出し、1990年に退職した。

『日本の素顔』シリーズのなかで、吉田が制作担当したものとして確認できるのは、1957年11月10日放映の第一回「新興宗教をみる」から始まって、「生きている史蹟」「三つの年の瀬」「日本人と次郎長」「南の孤島・与論島」「ガード下の東京」「神風登山・谷川岳の記録」「さいはての地知床」「アンバランス」「全学連」「職人―昔を守る人々」「特許権―現代産業を支配するもの」「四角い鏡」「テキ屋」「ある玉砕部隊の名簿」「古城落成―昭和築城時代」「隠れキリシタン」「競輪立国」「泥海の町 名古屋市南部の惨状」「板ばさみ」「土地飢饉」である。

吉田は『日本の素顔』の発想のルーツは柳田国男であると述べている。

「柳田国男氏が〈率直にいぶかる心〉が何より大切だ、といわれたように、私はドキュメンタリー制作者にとって何より必要なものは、二十年前でも今でも、〈意味のある異常を感じとる能力〉だと思うのである。」〔吉田 1977 : 49-81〕

「すべての仕事で一貫して志向して来たものが、曲がりなりに〈日本人論〉だった（中略）目標の巨峰は、柳田国男先生の業績なのである。柳田先生が〈常民〉から探ろうとしたことを、私は異常民から探ろうとした。」〔吉田 1973 : 25-32〕

ここで、吉田が言うところの「異常民」とは、『日本の素顔』の内容に即して言い直せば、「異質なもの」「異質性」と言い直すことができるだろう。日本社会に内在する「異質性」を掘り起こすことが最も強い動機であったと述懐していると言えよう。

社会の表面は転変しているように見えるけれども、底流に在るものをどのように可視化させることができるのか。不可視に載り込んでいく「方法」をどのように創造していくことができるのか。吉田が道しるべとしたのは柳田国男であり、探求の目標として設定したのが「異質性」の発掘であった。

それぞれ企画をたてて撮影に駆けずり廻っているが、その行動範囲は日本全国だし、ふつうの人には馴染みのないような所へ好んで出かけるものだから、ずいぶんいろいろな目にも会う。いつも、何よりもまず思うことは、「日本という国は深い」ということだ。面積は狭いにちがいない。しかし、その社会的な深さとなると、底知れぬ深淵のような気がする。人目にふれぬその底のほうには、想像もつかぬさまざまな生活が秘められているのである。そしてまた、そういうところにこそ、日本のムードを本当に作っている、素顔の人々が生きているのだ。（「ブラウン管に賭けた熱情」『文藝春秋』1958年7月号、〔吉田 1973 : 140-151〕）

合理的な市民社会の建設に向けて、社会が再編されつつあるように見える一方で、底知れぬ奥深いものが社会の根底にあるという確信は柳田から得たものであろう。社会の周縁部に秘められている非合理的にもみえる様々なものに、重要な意味が込められているという認識が不可視に載り込む強いモチベーションになったといえる。不可視に載り込んでいくことは容易なことではないが、撮

影カメラという新しいツールが、同時代の不可視への挑戦を誘う媒体になった。

高度経済成長初期の「格差の顕在化」は「新しい技術を使いこなそうとする意欲」と連動して、「異質性の意識化」につながった。そして「異質性へのまなざし」は、「近代社会が自らのうちに抱え込む非合理」や「日本社会の多重性・多様性」の探求につながっていったといえよう。このような社会的思考を深める媒体となるカメラの効果を、吉田は「考えるカメラ」と表現している（「テレビ・ドキュメンタリーとは何か」『記録映画』1958年9月号、[吉田 1973: 25-32]）。このように撮影カメラを通して、「社会観察」を「思考」へと昇華させていくための模索がなされていた。

格差が顕在化する時期は、様々な角度から異質性を掘り起こし、日本社会の本質について思考を深める機会になる。新しい調査技術は、そのような行為を刺激し、モチベーションを高める効果をもつことを吉田の例は示しているといえよう。

### 3 方法のルーツ

#### (1) ラジオの「録音構成」

「考えるカメラ」のアイデアが生まれてきたプロセスを技術的な側面からたどっておこう。上記引用文に、この番組が始まった当初、同類の番組は他になく、「ドキュメンタリー」と呼称する習慣もなかったことが述べられている [吉田 1994: 186]。

制作者たちは「フィルム構成」という呼称を用いたが、これは「ラジオの録音構成」から作り出された造語だった。「ラジオの録音構成」と同様のことをフィルム（映像）を使って試みるという意図を示したもので、『日本の素顔』制作者たちがモデルにしたのはラジオ番組だった。

「ラジオの録音構成」は、特定のテーマを設定して、関係者の証言・意見を集め、効果的なナレーションと組み合わせ、社会事象を掘り下げていく番組である。NHKでは『社会探訪』『社会の窓』『時の動き』などのラジオ番組がこれに当たる [丹羽 2001: 164-177]。現実音とインタビューだけで現場を「目に見えるように」構成するには技量と個人のセンスが必要だった。个性的かつ意欲的な内容が人気で、ラジオの花形番組だった [桜井・東野 2012: 2-21]。

『日本の素顔』の制作ディレクターの一人だった小倉一郎は、NHK入局前にラジオで聞いた『女囚』という「録音構成」番組が鮮烈な印象で、放送の仕事を目指すと述懐している。それは和歌山刑務所に収監された女性の独白で、経過説明のナレーションがわずかにあるだけで、音楽もなく、30分間女性の声だけがライフヒストリーを語るものだった。淡々とした述懐であることがかえって迫力に満ち、聞かざるをえなかった。小倉にとっては新鮮で、戦争中の大本営発表やプロパガンダ放送、戦後の大衆向け放送にはない迫力を感じさせた [桜井・東野 2012: 2-21]。

「デンスケ」というニックネームで呼ばれていた携帯用肩掛録音機によって、取材の機動性が向上し、このような臨場感に富んだ制作が可能になっていた。

「音声テープのかわりにフィルムを素材にして、構成番組がつかれないかというのがその発想で、いわゆる記録映画劇場用のドキュメンタリー・フィルムがモデルではありませんでした。それどころか、記録映画、ドキュメンタリーとはできるだけ距離をおこうと努めたのです。」

「いままでの記録映画、劇場用のドキュメンタリー・フィルムが売りものにした類の「秘境

性」とか、特定のイデオロギーの片棒をかつぐ「プロパガンダ性」から逃れたい、たとえ外見はドキュメンタリーと似たものでも、こっちはカメラを考える道具にあって、視聴者の思考に手がかりを提供し、共に考えるものとした、という内容でした。

その考えは、いまも変わっていません。いまなら「映像構成」と名づけたところでしょうが、ともあれ録音構成をモデルに、記録映画とは距離をおこうとした。」〔吉田 1994 : 186〕  
このように『日本の素顔』制作スタッフは、ラジオ番組制作の経験があり、ラジオ番組の良質な点を継承して、映像用の制作方法を創造することを志した。

このような「声」の重要性を認識したことを物語る経験談は貴重である。小倉が『女囚』に感じた迫力は、私たちフィールドワーカーが質的調査でインタビューを実施しているときに感じる同様の経験を想起させる。「声」の迫力、オーラル・ヒストリーを「語る」ことに内在している「経験の迫力」が、それを採集することへのモチベーションを喚起する。テレビ・ドキュメンタリー制作の根本に、ラジオ番組制作で実感した「声」と「経験」の重要性の認識があったことは、社会調査方法史の点からみると大変興味深く、示唆に富む。

## (2) 方法の創造

このように『日本の素顔』は記録映画の系譜ではなく、ラジオの「声」の系譜に位置づけられる〔丹羽 2001 : 164-177〕。ラジオ制作の良質な点を、映像制作に継承しようとする姿勢が方法を工夫させた。『日本の素顔』制作中から、吉田は方法についてしばしば次のように語っている。

「テレビ・ドキュメンタリーという分野は、さしあたり、スクリーンの記録映画という分野と全く無縁のものと考えて良い、とぼくは思っています。」

(「テレビ・ドキュメンタリーとは何か」『記録映画』1958年9月号、〔吉田 1973 : 25-32〕)

昭和32年、テレビにおける最初のドキュメンタリー番組「日本の素顔」シリーズをはじめるときに、私が考えついたのは、「最初に〈仮説〉をたて、それが現実によって検証されて行く過程をみせること」であった。というのは、新しく誕生するテレビ・ドキュメンタリーにとって、手本にし得る最も手近なものは、劇場用記録映画だったのだが、これはその歴史からいっても、プロパガンダ映画、国策映画というように、あらかじめ出来上がっている結論を押しつけるための手段として利用された伝統をもつ、と私は考えた。そして、新しく誕生するテレビのドキュメンタリーにこの要素が入ったら大変だと思ったのである。従って、何とかして新しいフィルムの使いかたを考えなければならなかった。そこで考えついたのは、ある仮説を立て、それが現実のなかで検証されて行く過程を描きながら、率直に制作者の思考能力を問う、という作りかたをすれば、あらかじめできている結論を主張したりせず、にすむのではないか、ということであった。

〔吉田 1977 : 49-81〕

「こうして苦行ともいべき制約の下から、却って僕にとってはかけがえのない制作の方法が生まれて来ている」「僕の最もやりつづけた制作方法となっている。」「僕の制作するも

のは、すべてが流動して未完結なある思考の、プロセスである。]

〔「不完全燃焼を忌む」『三田文学』1959年10月号、〔吉田1973:125-139〕〕

以上のように、吉田は記録映画をアンチテーゼとして、「フィルム構成」を創造していったと繰り返し述べている。記録映画もテレビ・ドキュメンタリーも文化的構築物である点では同様である。しかし、吉田の意図するところは、カメラを「思考を深める媒体」として如何に使うかという点であり、これが記録映画のあらかじめ作られたストーリー性とは異なることを主張している。カメラを使って、「思考を深める回路」をどのように構築するのか。映像資料としての『日本の素顔』の意義の一つは、「社会観察」を「思考」へ昇華させる模索や試みをたどることができる点にあると言える。

吉田が考えついた方法が、映像による「仮説・検証」で、「思考回路」を示すことに重きを置き、解釈の定説を作ることを避けることをめざすというものであった。

「ショットとは、発見であります。」「発見は、編集どころか撮影のずっと前に、はっきりした目的意識が確認されていて初めて出来るものなのです。」「この目的意識は、仮説という態度にちかい」

「仮説の態度で入ったものは、最後まで仮説のかたちで終わります。三十分間、その仮説が現実と衝突する過程を示し、そのままふっかけて視聴者に投げ出され、今度は視聴者のアクチュアリティーのなかでの実験結果を待つ、ということになります。」

〔テレビ・ドキュメンタリーの構成』『放送文化』1960年2月号〔吉田1973:52-63〕〕

「記録映画はひとつの完全なシナリオのもとに、きちんと入口と出口があって完成している。」「『日本の素顔』は、今の現象をこう見るっていうところから企画が出ていますけれど、持論を説くというよりも問題提起なんです。ある仮説を立ててから、それを検証していくプロセスを見せて、こういう状態になってます、あとはご自分でどうぞ考えて下さい」っていう、いわば出口をないようにしたんです。

（話者：吉田直哉、第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会1」）

上記で吉田も述べているように、「仮説」とは、観察のねらいを明確にすること、「目的意識」を持つことであった。ただ漫然とカメラを回していても焦点の定まった映像は収集できないし、思考を深めることにもつながらない。目的意識を明確にしてこそ、意味がある社会観察につながる。「検証」とは、そのようにねらいを定めて、熟考に値するデータを集めることである。良質のデータを集積し、その中から考えるべき内容をくみ出す。収集、選択を経て、論理的な構成を組み立て、制作者の「思考回路」を提示し、視聴者の「思考回路」を刺激する。このようにして日本社会を探究する同伴者を生み出してゆく。そして、カメラを通して、自分がいま何を見ているのかを再帰的に問い直してゆく。このような経験を制作者と視聴者が共有することをめざしたのが、吉田が述べる「仮説・検証」のねらいといえよう。



### (3) 時間的制約

型にはまった結論を述べることを避けるという志向性は、技術的な問題と連動していたと思われる。テレビは技術面で記録映画と大きく異なる制約条件を抱えていた。制作時間が短いという制約である。

4週間に1本の割合で自分の番が回ってくるわけです。そうすると2週間でロケ、1週間で編集して生放送をして、次の1週間で準備して、次にまた取材に出て行くというスケジュールなんですね。時間に追われる中で、僕はいろんなシーケンス（番組の流れ・構成）を現場に行って撮影しながら一生懸命考えてました。

（話者：藤井卓雄—『日本の素顔』ディレクター経験者、第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会2」）

水俣病の取材・放映で、大きな意義を果たした「奇病のかげに」制作の場合も同様である。

1日半で撮っちゃったんですよ、「奇病のかげに」。基幹部分というかね、1日半で撮っちゃったんです。だからもう非常にスピードが速いですな。やはり、こういう稼業はスピードが身上だと思っんです。それからね、やってる間はね、ラジオの録音構成みたいな調子でやったんですわ。

（話者：小倉一郎—『日本の素顔』ディレクター経験者）〔桜井・東野 2012:2-21〕

『日本の素顔』が発足する前に、担当者は記録映画の制作会社に足を運び、時間的條件の違いを痛感した。

劇場用の記録映画では、長時間をかけて制作されるその作品のテーマは、もともと「映画的」なものが選ばれ、画面それ自体で表現し尽くせるというものがとりあげられる傾向があります。

「テレビ・ドキュメンタリーとは何か」『記録映画』1958年9月号〔吉田 1973:25-32〕

とにかくオールフィルムでできるかどうかリサーチしようと、岩波映画とか日映（日本映画新社）に行って聞いたわけです。30分ぐらいの社会番組をフィルムで作りたいって。そうしたら彼らは「30分の長編、冗談じゃない」って言うんですよ。（中略）岩波記録映画とか文化映画は制作に3年はかけていると言うんですね。

（話者：吉田直哉、第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会1」）

このように担当ディレクターは1カ月に1本を仕上げるというノルマを抱えていた。

社会調査方法の視点から、『日本の素顔』に学ぶべき点として次のような諸点を挙げることができる。特筆すべき点は、取材対象の幅の広さであり、高度経済成長初期の格差の実態を映像にとどめていることである。とくに底辺層の生活に分け入って、独特の生活習慣を記録していることは貴重である。

単にカメラがあったから記録可能になったわけではなく、本稿で考察してきたように、柳田国男に学び、不可視に載りこむ意欲、異質性を発掘しようとする姿勢、考えるカメラとして思考を深めようとする志向性が、広範囲の対象と向かいあい、貴重な記録を蓄積することにつながったと思わ

れる。制作時からすでに50年を経過しているが、多様でユニークな取材対象が集積されている映像資料になっており、「再検証」の意欲を刺激する。

#### 4 実例の分析：『日本の素顔—アンバランス』

「仮説・検証」は番組のなかで、どのように展開しているのだろうか。実例を一つ挙げておこう。吉田直哉が担当した1958年9月21日放送の『日本の素顔—アンバランス』である。戦後13年を経過して、成長した領域と停滞している領域の齟齬が顕在化している状況を取り上げている。社会的基盤が整っていない状況で、消費意欲が過度に刺激されて、社会のいたるところで発生している不整合について問題提起した番組である。

番組冒頭は、路幅が狭く未整備の道路に車があふれている光景から始まる。「齟齬・不整合」の根源は何か。

〈狭い交差点で、自動車が渋滞しているシーケンス〉

「戦後13年を経た日本でいちばん目につくのが、あらゆるところがアンバランスな現象でうずまっている事実だと言う人がいます。」「アンバランス、不均衡、釣り合いがとれていないこと、ちぐはぐなこと。」「狭い交差点に自動車が角つきあわせている光景もアンバランスの一つの例です。」「高いお金を出して輸入した外車、日本工業の粋を集めた国産車、どれをとっても世界的水準をゆく車ばかりが走っているそうですが、それにしては何と狭い道なのでしょう。」「世界でも最高の部類に属する高級車、しかも最新型。道路に不似合いなこんな大型車を乗り回す精神が悪いのか。それとも広い道路も作らずに、狭い道路だらけにしておく政治が悪いのか。」「いずれにしても、このアンバランスな光景は、我々日本人が持っている何かによって、作り出されています。」

ナレーションによって提示された「仮説」は、「アンバランスを生み出している原因は日本人の何かある精神性に由来しているのではないか」というものである。視聴者は日々の生活で直面している様々な不便に思い当たると同時に、自らも刺激され続けている消費意欲が個人的生活の充足に向かって増大している事実を改めて気づくであろう。社会生活の充足、豊かな社会生活の建設に発展していない現実を政治的要因に帰することは簡単だが、個人生活と社会生活の充足が連動しない要因は政治的問題だけでは説明できず、総合的視野に欠けて利己心に走ってしまうのはなぜなのかと、我が身を振り返って良心の呵責を感じながら、利己心の発生源を改めて問う心持ちになる。

そのような視聴者の心に寄り添うように、番組は誰でも思い当たる日常的な「齟齬・不整合」の風景、たとえば〈大型バスが、商店街を貫く狭い道を通り抜けようとし、商店の軒先をかすり、買物客にクラクションを鳴らし続けているシーケンス〉の映像を見せたのち、多くの人に不可視だった社会の片隅に潜む「アンバランス」を映し出してゆく。

〈世田谷の元兵舎で、老朽化した暗い住宅。その狭い空き地で子供たちが遊んでいるシーケンス〉

「戦争直後、戦災者を収容するためにたくさんの応急施設が作られました。世田谷の元兵舎もその一つ。ここでは馬屋までが住宅に改造されたのですが、雨風に朽ちて、終戦直後よりももっとひどいすがたのまま、いまだに東京都直営の住宅として使用されています。」「いま

なお馬の臭いが残っているという馬小屋住宅にはもっぱら引き揚げ者が収容されているのです。が、日は当たらず、雨は漏り放題、ここでは〈もはや戦後ではない〉などとは口が曲がっても言えません。】

#### 〈鉄筋コンクリートで建設された最新の都市型マンションのシークエンス〉

「ところが庶民が住めそうな安い住宅より先に建つのは、頭金何万円というデラックス・アパートばかり。大勢の人が住める手頃な住宅と、一部の人のものとどっちが先かと考えるより先に、まず世界的水準をいくデラックスにとりかかってしまうのが、日本人の悲しい習性のようにみえます。」

このようにナレーションは、日本人の精神論を深く問うような論点へと導いていく。番組のなかでは、様々なアンバランスな光景が映し出されていくのだが、なかでも衝撃的な映像は、都市と地方の子どもたちの教育環境の格差である。給食の場面によって、その事実が突きつけられる。

#### 〈東京の小学校の給食風景のシークエンス〉

「子どもたちの社会にも、アンバランスな政治がもたらした不公平な差別があります。その一例が給食です。東京の近代的校舎で学ぶ子どもたちは、衛生の行き届いた、機械化された調理室で作られたカロリーの高い完全給食を昼食に食べることができます。エレベーターであげられた料理は各教室に配膳され、育ち盛りの子どもたちの旺盛な食欲を満たします。戦後、子ども達の体位が向上したのも給食のおかげだとさえ言われています。」

#### 〈与論島の小学校の昼食風景、持参した芋を食べる子どもたちのシークエンス〉

「しかし、都会の子どもたちと、僻地の、たとえば離れ島の子どもの間では、全く雲泥の差別があるのです。奄美大島の南、与論島の茶花小学校、中央から遠く離れた島だから、こんな草葺きの校舎でも仕方がないとお考えでしょうか。サツマイモしか弁当に持ってこれない貧しい島の暮らし。ここでこそ、給食は役に立つはずなのに、何の給食も行われてはいません。離れ島に生まれただけに受けなければならない不公平、これもアンバランス日本の一面です。」  
給食用のエレベーターが完備した校舎でおいしそうに給食を食べる子どもたちと、草葺きの風が吹き抜ける校舎で、昔ながらのかごからサツマイモを取り出して皮をむいて食べている子どもたちの光景は、同時代の同年齢の子どもたちにこんなに大きな格差があってよいのかと胸が痛む。映像がもつ大きな効果の一つは、同時期に、異なる空間では何が起きているかという、「共時的に発生している異質性」を突きつけることである。

このあと、デパートのデラックス・コーナー、下水が整備されず汚水を川に垂れ流しにしている東京都内の光景、夜のディスコで踊りに熱中する若者、ゲイバーなど、様々な世相・風俗を通して、社会的なアンバランスが映し出される。そして、番組は次のように終わる。

#### 〈失業者の一群のシークエンス〉

毎朝、職業安定所の周辺には大勢の失業者が押し寄せます。この人たちこそ飽和状態にある日本の経済情勢の犠牲者です。失業者の多さは日本経済に、社会福祉の問題に暗い影を投げ

かけているのです。日本の社会に見られるこうした数々のアンバランスを復興途上の過渡期だから仕方がないという人もいます。しかし、日本のアンバランスな現象は、もともと事の大小、軽重を無視して不要不急のものを優先してしまう精神から生まれているのです。過渡期にあれば常にも増して事の大小、軽重をはかりにかけ、何を優先的に進めるかという判断が要求されるのではないのでしょうか。こういう数々のアンバランスが至るところに見られるという日本の現状は、(音声不鮮明) 決して誇りにはなり得ないでしょう。

最後はアンバランスを解消する方法を提示するわけではなく、日本人の精神性を問うかたちで終わる。視聴者は自分を取りまく様々なアンバランスを想起し、自分は何を優先して来たか、これからのどのように行動すべきか、自らの来し方行く末を思案する状態におかれる。

以上のような展開が「仮説・検証」という表現で追求された「考えるカメラ」の方法である。『日本の素顔』には、「これでいいのでしょうか」という「特有の語り」、締めめのナレーションがあった〔丹羽 2001 : 177〕。問題を提起し、考察の持続を促すナレーションである。

このように映像と、論点を明確にしてゆくナレーションによって、視聴者は制作者の思考回路を追体験する。提起された問題は深く、すぐに答えを出せるレベルではない。視聴者は刺激され、それぞれの思考活動が持続してゆく。映像が示す現実、50余年経たのちも、視聴者に深い印象を与える。映像による「実証の迫力」に満ちた映像資料といえよう。

## 5 近代日本における「社会観察」の系譜：底辺層へのまなざしと方法

このように高度経済成長初期という特定の時期に、均質とはほど遠い日本社会の状況や、「共時的に発生している異質性」を記録している点が、『日本の素顔』の歴史的映像資料としての価値である。文書資料には残りにくい、社会の底辺層の存在を映像によって実証している。

このような意義は、社会調査方法史における底辺層の記録の中に次のように位置づけることができるだろう。日本では、底辺層を調査した社会調査の先駆として、明治期の貧民ルポルタージュの系譜がある。都市下層を対象としたこのような社会観察の記録は、貧民窟踏査、細民調査、不良住宅地区調査、要保護世帯調査の4つに分けられる〔中川 1985 : 13-15〕。

貧民窟踏査の代表的なものに、松原岩五郎『最暗黒之東京』、横山源之助の『日本之下層社会』(1899年)などがある。このほかに、桜田文吾、幸徳秋水、斎藤兼次郎、鈴木梅四郎などに都市の底辺層に焦点をあてた貧民ルポルタージュがある。これらの著者には新聞記者出身という共通点がある。つまり、もともとジャーナリズムの著作として、これらは発表された。

印刷技術の発達、印刷物の流通経路の整備によって、新聞は当時の拡大するメディアの一つだった。想定された読者は一般人である。新聞記者は新しいメディアのコンテンツ制作者であり、そのような時期に一般人にとって「不可視」だった世界に切り込む着眼点や試みが生まれ、斬新さが一般読者に評価された。このようなメディア技術の発達と、「不可視」「底辺層」の現実をえぐる試みが連動して登場する構造は、草創期のテレビとルポルタージュにも共通している。交通網が発達し、移動の利便性が高まっていた1960年前後には、このような底辺層の発掘は大都市内部に留まることはなく、全国各地に向かった。とくに僻地とよばれる日本の空間的な周縁部や、社会構造の

周縁的な位置にある人々に構造的な不均衡が集積している状態、つまり「共時的に発生している異質性」を顕在化させた。

明治期に都市下層に焦点をあてた横山源之助の社会観察について、川合は社会調査史の視点から、次のような意義をあげている。第一の意義は、日本の下層社会、労働者の現状を積極的に観察し、「社会観察」の重要性を示した点である。第二の意義は、横山の現地における資料収集などの徹底した「社会観察」は、日本の近世・近代を通して蓄積されてきた地方巡行、諸国巡遊、巡見、巡察、視察、紀行、探遊、遊覧、旅人、記録文学などの方法を継承している点である。第三の意義は、そのような近世・近代の蓄積の継承によって、横山の視点は貧民・下層・労働者など「無名者」の存在・生活に焦点化され、後れたように見える「多数の労働者」「下層社会」が社会の根底にあるからこそ、「進歩が促される」社会構造が存立している事実に向ったことである [川合 1994: 96-23]。

川合の指摘は、社会調査が欧米から輸入された学問方法であるという認識に再考を迫る。日本社会には常に周縁的な位置におかれた人々がいたが、それぞれの時代に日本人はどのような方法によってそのような社会の根底に迫ること試みてきたのか、という視点が拓ける。近世・近代の地方巡行、諸国巡遊、巡見、巡察、視察、紀行、探遊、遊覧、旅人、記録文学などの成果、柳田民俗学の方法、新聞という文字媒体が社会に普及した時期に「新たな領域」へ目を向けた「社会観察」の都市下層ルポルタージュなど一連の日本人の試みの系譜に、1950年代後半から60年代前半の「共時的に発生している異質性」を顕在化させたテレビ・ルポルタージュを位置づけて考えても良いのではないかと思う。撮影カメラという新たな調査技術の登場が、「社会観察」の方法を刺激したのである。

## 6 民衆の生活と「固有性」の発見

このように日本固有の「社会観察」の系譜があるのではないかという視点に立った場合、『日本の素顔』にみられる底辺層への着眼には次のような意義があると考えられる。

1950年代後半から60年代前半にかけて、格差が大きかった社会的状況において、遅れたように見える「フィールド」が社会の周縁部にあった。そこにみられる「異質性」にこだわり、カメラを通して社会観察を続けると、そのような周縁部には独特の「固有のもの」が脈打っていることに気づくようになった。「固有のフィールド」を発見していったのである。

「固有のもの」が生きづく力強さに驚くとともに、そのような「固有のフィールド」に生きる人々が時代趨勢のなかで不利になりつつある状況があった。近代的なしくみでは救済されない人々は身体になじんだ、身近な人々との間でかわす精神的な救済方法に依拠するしかない。このような人々がかろうじて生きていけるこのような状況を一体どのように考えたら良いのか。

周縁部を成り立たせている民衆の「固有の論理」の考察が、日本社会を探究する一つの方法であることを撮影カメラを持つ人々は理解していった。そのような探究の道筋が表れて、『日本の素顔』シリーズの意義がある。

## 文献

古田尚輝、2006、「テレビジョン放送における〈映画〉の変遷」『成城文藝』196。

- 後藤範章、2009、「ビジュアル・メソッドと社会学的想像力」『社会学評論』60（1）：40-56
- 後藤範章、2010、「ビジュアルな記録を利用する」『よくわかる社会調査 プロセス編』ミネルヴァ書房 186-201.
- 後藤範章 監訳、2012、『ビジュアル調査法と社会学的想像力』ミネルヴァ書房.
- 羽仁進、1959、「テレビプロデューサーへの挑戦状」『中央公論』1959年11月号：198-207.
- 石田佐恵子、2009、「ムービング・イメージと社会」『社会学評論』60（1）：7-24.
- 石田佐恵子、2012、「ビジュアルデータ・アーカイブズを用いた二次分析の可能性」『社会と調査』8：54-63.
- 石川淳志・佐藤健二・山田一成編、1998、『見えないものを見る力—社会調査という認識』八千代出版
- 川合隆男、1994、「横山源之助と社会観察」、石川淳志・橋本和孝・浜谷正晴編『社会調査—歴史と視点』ミネルヴァ書房：96-123.
- 川合隆男、2004、『近代日本における社会調査の軌跡』恒星社厚生閣.
- 宮本常一、1967、『私の日本地図 第1（天竜川に沿って）』同友館.
- 中川清、1985、『日本の都市下層』勁草書房.
- 丹羽美之、2001、「テレビ・ドキュメンタリーの成立—NHK〈日本の素顔〉」『マス・コミュニケーション研究』（59）：164-177.
- 崔銀姫、2006、「日本におけるテレビ・ドキュメンタリーの歴史の空間的考察」『北海道東海大学紀要・人文社会科学系』18：65-80.
- 桜井均・東野真、2012、「制作者研究：小倉一郎—映像と音で証拠立てる」『放送研究と調査』62（2）：2-21
- 佐野眞一、2003、『宮本常一のまなざし』みずのわ出版.
- 佐野眞一、2004、『宮本常一の写真に読む失われた昭和』平凡社.
- 佐藤健二、1998、「〈方法〉から見た調査」、石川淳志・佐藤健二・山田一成編、1998、『見えないものを見る力—社会調査という認識』八千代出版：239-344.
- 佐藤健二、2011、『社会調査史のリテラシー』新曜社.
- 鈴木常恭、2005、「テレビ・ドキュメンタリーにおける表現の生成と変容についての一考察—〈物語るドキュメンタリー〉と〈物語らないドキュメンタリー〉」『尚美学園大学芸術情報学部紀要』8：11-33.
- 武田尚子、2009、『もんじゃの社会史 —東京・月島の近現代の変容—』、青弓社.
- 武田尚子、2009、『質的調査データの2次分析—イギリスの格差拡大プロセスの分析視角』、ハーベスト社.
- 吉田直哉、1958、「テレビ・ドキュメンタリーとは何か」『記録映画』1958年9月号＝〔吉田 1973：25-32〕
- 吉田直哉、1958、「ブラウン管に賭けた熱情」『文藝春秋』1958年7月号＝〔吉田 1973：140-151〕
- 吉田直哉、1959、「羽仁進氏の挑戦に答える」『中央公論』1959年12月号：118-126.

吉田直哉、1960、「テレビ・ドキュメンタリーの構成」『放送文化』1960年2月号＝〔吉田 1973 : 52-63〕

吉田直哉、1973、『テレビ、その余白の思想』文泉.

吉田直哉、1977、『私のなかのテレビ』朝日新聞社.

吉田直哉、1994、「やらせの反対語は」『森羅映像』文藝春秋 : 186-193.

吉田直哉、1994、「マイノリティー・ウォッチング」『森羅映像』文藝春秋 : 210-215.

第6回アーカイブス・カフェ座談会「日本の素顔座談会 (1)」 「日本の素顔座談会 (2)」

<http://www.nhk.or.jp/archives/cafe/>

表1 『日本の素顔』サブタイトル一覧

	放送日	『日本の素顔』サブタイトル	担当ディレクター
1	1957/11/10	新興宗教をみる	白石・斎藤・吉田直哉
2	1957/11/17	養護施設の子供たち	
3	1957/11/24	貸間あります	清洲
4	1957/12/1	九十九里浜の漁師たち	渡部(和)
5	1957/12/8	生きている史蹟	白石・斎藤・吉田直哉
6	1957/12/15	三つの年の瀬	白石・斎藤・吉田直哉
7	1957/12/22	玩具の季節	清洲
8	1958/1/5	日本人と次郎長	吉田直哉
9	1958/1/12	樽太鼓のかげに	立川
10	1958/1/19	瀬戸内海の子供たち	
11	1958/1/26	狭き門	
12	1958/2/2	下水なき文化国家	吉田直哉・斎藤
13	1958/2/9	移民	
14	1958/2/16	三軍の装備	白石
15	1958/2/23	春を待つ子供たち	立川・倉島
16	1958/3/2	犬の世相	
17	1958/3/9	閩門	田沼
18	1958/3/16	お寺様々	
19	1958/3/23	南の孤島・与論島	斎藤・吉田直哉
20	1958/3/30	解散風の吹く国会	
21	1958/4/6	季節労働者	
22	1958/4/13	観光日本	白石・鈴木
23	1958/4/20	青い目の子供達	
24	1958/4/27	部落	
25	1958/5/4	働く子供たち	田沼・渡部
26	1958/5/11	迷信	白石・立川
27	1958/5/18	麻薬	
28	1958/5/25	学校繁昌記	田沼・渡部
29	1958/6/1	ガード下の東京	白石・吉田直哉
30	1958/6/15	水の上にくらす人々	小松・斎藤
31	1958/6/22	大人にならない子供たち	
32	1958/6/29	自動車ラッシュ	渡部
33	1958/7/6	定年	田沼
34	1958/7/13	神風登山・谷川岳の記録	吉田直哉
35	1958/7/20	売春防止法	
36	1958/7/27	ハイティーン	渡部・倉島
37	1958/8/3	絹	田沼
38	1958/8/10	さいはての地「知床」	吉田直哉
39	1958/8/17	四人の山の子	
40	1958/8/24	村芝居	渡部(和)
41	1958/8/31	台風銀座	斎藤
42	1958/9/7	牛乳	田沼
43	1958/9/14	嵐の中の先生	小倉一郎
44	1958/9/21	アンバランス	吉田直哉
45	1958/9/28	ボタ山のかげに—中小炭鉱	渡部・尾西
46	1958/10/5	豊作	
47	1958/10/12	警察官	
48	1958/10/19	母と子	
49	1958/11/2	文化運動	田沼
50	1958/11/9	もっと光を	小松・上田
51	1958/11/16	織屋と女工	
52	1958/11/23	無医村	白石・瀬川
53	1958/11/30	全学連	吉田直哉

	放送日	『日本の素顔』サブタイトル	担当ディレクター
54	1958/12/7	この人達に愛の手を	田沼・増沢
55	1958/12/14	よいどれ日本	渡部(和)
56	1958/12/21	瀬戸内海の漁師たち	大原
57	1959/1/4	職人—昔を守る人々	吉田直哉・瀬川
58	1959/1/11	産業開発青年隊	田沼
59	1959/1/18	日本の中の朝鮮	荻野
60	1959/1/25	日本政府専売品	斎藤・上田
61	1959/2/8	神の国日本	渡部・瀬川
62	1959/2/15	引揚14年	
63	1959/2/22	特許権—現代産業を支配するもの	吉田直哉・斎藤
64	1959/3/1	テレビ 現代のマンモス	尾西・斎藤
65	1959/3/8	満員	瀬川・渡部
66	1959/3/15	飯場	大原
67	1959/3/20	四角い鏡	吉田直哉
68	1959/3/29	日本の空	上田・瀬川
69	1959/4/12	在日外人	尾西
70	1959/4/19	マヒと闘う	
71	1959/4/26	テキ屋	吉田直哉
72	1959/5/3	憲法第25条	渡部・上田
73	1959/5/10	観光ブームの裏街道	斎藤
74	1959/5/17	捜査本部	
75	1959/5/24	停車場人生模様—東京駅の24時間	尾西
76	1959/5/31	ある玉砕部隊の名簿	吉田直哉
77	1959/6/7	修行	渡部(和)
78	1959/6/14	結核	斎藤
79	1959/6/21	二つのライン	
80	1959/6/28	古城落成—昭和築城時代	吉田直哉
81	1959/7/5	右翼	尾西
82	1959/7/12	市場	瀬川
83	1959/7/19	どん底人生	瀬川
84	1959/7/26	路上の恐怖—交通事故	鈴木正紀
85	1959/8/9	隠れキリシタン	吉田直哉
86	1959/8/16	モンテンルパへの追憶	尾西
87	1959/8/23	子どもの見た夏休み	荻野
88	1959/8/30	コタンの人々—日本の少数民族	小倉一郎
89	1959/9/6	災害日本	渡部(和)
90	1959/9/13	のれんと鉢巻	瀬川
91	1959/9/20	美人天国	鈴木正紀
92	1959/9/27	競輪立国	吉田直哉
93	1959/10/4	泥海の町名古屋市南部の惨状	吉田直哉
94	1959/10/11	川に映った東京	渡部(和)
95	1959/10/25	ボタ山は訴える	小倉一郎
96	1959/11/1	歌舞伎—その伝統と社会	尾西
97	1959/11/8	国鉄ローカル線	立川
98	1959/11/15	板ばさみ	吉田直哉
99	1959/11/22	二軍人生	菊川
100	1959/11/29	奇病のかげに	小倉一郎
101	1959/12/6	孤独の島“沖繩”	瀬川
102	1959/12/13	台風孤児	渡部(和)
103	1959/12/20	自衛隊	荻野
104	1959/12/27	もういくつねると—歳末の狂態とその裏側	尾西



	放送日	『日本の素顔』 サブタイトル	担当ディレクター
105	1960/1/10	土地飢饉	吉田直哉
106	1960/1/17	街の若者たち	瀬川
107	1960/1/24	大阪	
108	1960/1/31	国境の島 対馬	渡部(和)
109	1960/2/7	幼き受験生たち	小倉一郎
110	1960/2/14	患者集団	渡辺泰雄
111	1960/2/28	マンモス都市	小倉一郎
112	1960/3/6	セールスマン	瀬川
113	1960/3/13	火山灰地に生きて	渡辺泰雄
114	1960/3/27	地方議会	萩野
115	1960/4/3	馬	渡部(和)
116	1960/4/10	競り合い経済学	小倉一郎
117	1960/4/17	三行広告	中村
118	1960/4/24	暗い海辺	瀬川
119	1960/5/1	日本人の家	尾西
120	1960/5/8	三池	小倉一郎
121	1960/5/22	行動の世代—高校生のある断面	渡辺泰雄
122	1960/5/29	大津波	瀬川
123	1960/6/5	議長椅子	小倉一郎
124	1960/6/12	群衆	鈴木正紀
125	1960/6/26	9年間の記録—安保から安保まで	
126	1960/7/3	若者宿の人々	萩野
127	1960/7/10	人気	尾西
128	1960/7/17	この国の母たち	
129	1960/7/31	ある底辺	玉井(勇)
130	1960/8/7	黄色い手帳	
131	1960/8/14	いのちの値段	小倉一郎
132	1960/8/21	母子祭の夏	瀬川
133	1960/8/28	トカラの人々—ある離島の現実	
134	1960/9/11	黒い地帯—その後の炭鉱離職者達	
135	1960/9/18	先生の雑記帳	
136	1960/9/25	東京の大学生	宮原敏光
137	1960/10/2	小児マヒ地帯	渡辺泰雄
138	1960/10/9	地底—ある炭鉱事故の記録	小倉一郎
139	1960/10/16	政治テロ	
140	1960/10/23	万年豊作	
141	1960/11/13	上野—裏窓の世相	尾西
142	1960/11/27	不就学児童	鈴木正紀
143	1960/12/4	臨時労働者	
144	1960/12/11	繁栄の谷間—京浜工業地帯のある断面	瀬川
145	1960/12/18	開拓地	
146	1960/12/25	なにわの暮	玉井(勇)
147	1961/1/8	交通マヒ	尾西
148	1961/1/15	太陽のない教室—夜間中学生	宮原敏光
149	1961/1/22	行商	
150	1961/1/29	ヘロイン	
151	1961/2/5	土の中の共同社会	渡辺泰雄
152	1961/2/12	ある信者たち	
153	1961/2/19	雪害	
154	1961/2/26	旧軍人	萩野
155	1961/3/5	秘書	宮原敏光

	放送日	『日本の素顔』 サブタイトル	担当ディレクター
156	1961/3/12	ぼくらも日本人	
157	1961/3/19	文楽	
158	1961/3/26	デパート	
159	1961/4/2	兜町	宮原敏光
160	1961/4/9	歌は世につれ	瀬川
161	1961/4/16	サラリーマン	
162	1961/4/23	機関士—ある合理化の断面	
163	1961/4/30	傷ついた村	
164	1961/5/7	我は海の子	瀬川
165	1961/5/14	保母さん(1961/11/5)	宮原敏光
166	1961/5/21	学生寮—大学における人間性回復の方向	
167	1961/5/28	工場誘致	
168	1961/6/4	山林地主	渡辺泰雄
169	1961/6/11	精神衛生のカルテ	瀬川
170	1961/6/18	アマチュアスポーツ	
171	1961/6/25	霊峰	宮原敏光
172	1961/7/2	波止場	小池
173	1961/7/9	防衛大学生	藤井卓雄
174	1961/7/16	若い根っこ	
175	1961/7/23	まつり	
176	1961/7/30	レジャーの断面	宮原敏光
177	1961/8/6	消えやらぬ傷痕	
178	1961/8/13	ドクター稼業	
179	1961/8/20	浪花の芸人	
180	1961/8/27	流転の村—小河内ダムの30年	宮原敏光
181	1961/9/3	職業病	藤井卓雄
182	1961/9/10	奄美大島—その復興と不毛	
183	1961/9/17	妻の座	
184	1961/9/24	海拔0地帯	鈴木・玉井
185	1961/10/1	血液市場	宮原敏光
186	1961/10/8	入会争議	藤井卓雄
187	1961/10/15	あるミスの誕生	瀬川
188	1961/10/22	タクシー人生	宮原敏光
189	1961/10/29	禪	
190	1961/11/12	天草—出稼ぎの島の現実	
191	1961/11/19	求人	
192	1961/11/26	靖国神社	
193	1961/12/3	県人会—東京に生きる地方精神	宮原敏光
194	1961/12/10	町工場	
195	1961/12/17	黒い墓標—石炭産業合理化の断面	玉井
196	1961/12/24	株主	藤井卓雄
197	1962/1/7	勲章	
198	1962/1/14	狂った速度計—ダンブカーの事故とその背景	宮原敏光
199	1962/1/21	風土病	
200	1962/1/28	警視庁	瀬川
201	1962/2/4	易	
202	1962/2/11	埋もれた辺境—冬山の臨時労働者たち	宮原敏光
203	1962/2/18	アイデア	大原
204	1962/2/25	移住者	瀬川
205	1962/3/4	旧軍港	藤井卓雄

	放送日	『日本の素顔』 サブタイトル	担当ディレクター
206	1962/3/11	旧地主	
207	1962/3/18	閉ざされた島—ライ療養所の記録	
208	1962/3/25	底流—日本の素顔 4年間の記録	宮原敏光
209	1962/4/1	なわ張り	
210	1962/4/8	観光基地	
211	1962/4/15	傷夷軍人	
212	1962/4/22	傷心の谷間—伊那谷その後	宮原敏光
213	1962/4/29	正義感をめぐる12の証言	
214	1962/5/6	防衛産業	藤井卓雄
215	1962/5/13	日本の中の沖縄	
216	1962/5/20	釜ヶ崎からの報告	玉井
217	1962/5/27	内職立国	宮原敏光
218	1962/6/3	村の政治—4人の村長の記録	
219	1962/6/10	選挙	
220	1962/6/17	ガン対策の周辺	
221	1962/6/24	破産都市	宮原敏光
222	1962/7/8	創価学会	
223	1962/7/15	経営戦略時代	
224	1962/7/22	仏像受難—文化財保護の反省	
225	1962/7/29	恐山	宮原敏光
226	1962/8/5	ゴミの社会学	
227	1962/8/12	タレント市場	
228	1962/8/19	秘境返上—国土総合開発の問題点	
229	1962/8/26	フレキシネル段階 赤痢菌の周辺	
230	1962/9/2	大陸派	宮原敏光
231	1962/9/9	白衣の労働者	
232	1962/9/16	学習塾	藤井卓雄
233	1962/9/23	失対事業13年	
234	1962/10/7	奇禍	渡辺泰雄
235	1962/10/14	人づくり	宮原敏光
236	1962/10/21	華僑	
237	1962/10/28	組夫—石炭産業合理化の断面	藤井卓雄
238	1962/11/4	野丁場トビ	
239	1962/11/11	水子塚	鈴木正紀
240	1962/11/18	精神障害	
241	1962/11/25	故郷なき人々—小笠原疎開民の記録	宮原敏光
242	1962/12/2	D階層	藤井卓雄
243	1962/12/9	一杯船主	桜井(健)
244	1962/12/16	望楼—火災国日本の現状	
245	1962/12/23	教訓	
246	1963/1/6	チャンピオン	宮原敏光
247	1963/1/13	外国資本	藤井卓雄
248	1963/1/20	伝統産業	
249	1963/1/27	三割自治	桜井(健)
250	1963/2/3	切れた神経	
251	1963/2/10	原子炉の周辺	
252	1963/2/17	老後	
253	1963/2/24	研究室	藤井卓雄

	放送日	『日本の素顔』 サブタイトル	担当ディレクター
254	1963/3/3	土地はだれのもの	
255	1963/3/10	行くえ不明	鈴木正紀
256	1963/3/17	流通革命	
257	1963/3/24	地方議員	田辺
258	1963/3/31	家元社会	
259	1963/4/7	在日留学生	
260	1963/4/14	プライベート	
261	1963/4/21	夢のかけ橋	
262	1963/4/28	後援会	
263	1963/5/5	現代の子どもたち	
264	1963/5/12	誘拐	
265	1963/5/19	パイロット地区	藤井卓雄
266	1963/5/26	修学旅行	
267	1963/6/2	国鉄	
268	1963/6/9	遺跡の周辺	
269	1963/6/16	年功序列	
270	1963/6/23	国境周辺	藤井卓雄
271	1963/6/30	消費者主権	
272	1963/7/7	水利権	
273	1963/7/14	失われた歳月—長期裁判の代償	
274	1963/7/28	海運	
275	1963/8/4	税関	藤井卓雄
276	1963/8/11	よみがえる墓標	
277	1963/8/18	祇園	玉井
278	1963/8/25	ある閉山—金属鉱山の現実	玉井
279	1963/9/1	自由化1年	
280	1963/9/8	相場師	樋口
281	1963/9/15	私鉄	
282	1963/9/22	興行師	藤田俊彦
283	1963/9/29	教祖誕生	青木
284	1963/10/6	情緒障害児の記録	鈴木正紀
285	1963/10/20	公害都市	
286	1963/10/27	農協	
287	1963/11/17	15歳の自衛官	
288	1963/11/24	放浪	
289	1963/12/1	補償以後	
290	1963/12/8	あの戦いの日々	
291	1963/12/15	空洞—結核長期療養者の周辺	
292	1963/12/22	国鉄電車区	
293	1963/12/29	社会病質者の周辺	青木
294	1964/1/12	帰郷—漂海漁民の里	
295	1964/1/19	東京農民	
296	1964/1/26	道徳教室	
297	1964/2/2	砂利飢饉	
298	1964/2/9	御蔵島	中谷(英)
299	1964/2/16	灰色の海岸線	
300	1964/2/23	廃屋の村	青木
301	1964/3/1	貸家人対借家人—ある居住権をめぐる争い	
302	1964/3/8	公民館	
303	1964/3/15	企業学校	
304	1964/3/22	流水と人	
305	1964/3/29	山岸会	郷治
306	1964/4/5	暴走	

出典：NHK 提供資料より武田作成。

表2 『日本の素顔』内容分類

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)		分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)	
地域格差	南の孤島・与論島	1958/3/23	返還	日常生活	病気	フレキシネル段階赤痢菌の周辺	1962/8/26	隔離	薬事衛生行政
	さいはての地「知床」	1958/8/10	ウトロ	羅臼		エスニシ	日本の中の朝鮮	1959/1/18	猪飼野
	廃屋の村	1964/2/23	広島	奈良	コタンの人たち一日		1959/8/30	二風谷	知里真志保
	国境の島 対馬	1960/1/31	厳原	日韓貿易	華僑		1962/10/21	神戸	横浜
	火山灰地に生きて	1960/3/13	鹿児島	農民	公害	奇病のかげに	1959/11/29	水俣	水銀中毒
	トカラの人々ある離島の現実	1960/8/28	宝島	中ノ島		公害都市	1963/10/20	釜石	四日市
	奄美大島—その復興と不毛	1961/9/10	復興特別措置法	徳之島	社会福祉	空洞—結核長期療養者の周辺	1963/12/15	国立療養所	朝日訴訟
	天草—出稼ぎの島の現実	1961/11/12	崎津	牛深		もっと光を	1958/11/9	文京盲学校	東京光明寮
	故郷なき人々—小笠原疎開民の記録	1962/11/25	清水港	栃木県大日向開拓地		憲法第25条	1959/5/3	人権擁護	養護施設
漁業・漁村	流水と人	1964/3/22	季節労働者	酪農家	いのちの値段	1960/8/14	工場	鉱山	
	九十九里浜の漁師たち	1957/12/1	漁業・漁村	貧困	母子寮の夏	1960/8/21	大阪東住吉区駒川	生活保護	
	瀬戸内海の漁師たち	1958/12/21			失対事業13年	1962/9/23	婦人の労働者	ニコヨンホーム	
	暗い海辺	1960/4/24	増毛海岸	不漁	切れた神経	1963/2/3	脊髄損傷	身体障害者	
	補償以後	1963/12/1	東京湾	漁民	情緒障害児の記録	1963/10/6	情緒障害児		
炭鉱	帰郷—漂海漁民の里	1964/1/12	因島	正月	禅	1961/10/29	ノイローゼ患者の治療	刑務所の受刑者更生	
	ボタ山のかげに—中小炭鉱	1958/9/28	中小炭鉱	長崎県	精神障害	1962/11/18	精神病院	大阪郊外	
	ボタ山は訴える	1959/10/25	筑豊	貧困	子ども	養護施設の子供たち	1957/11/17	杉並区	東京家庭学校
	三池	1960/5/8	大牟田	三池争議	春を待つ子供たち	1958/2/23	身体障害児	特殊教育施設	
	黒い地帯—その後の炭鉱離職者達	1960/9/11	炭鉱離職者	三池	瀬戸内海の子供たち	1958/1/19			
	地底—ある炭鉱事故の記録	1960/10/9	豊州炭坑	初井	青い目の子供達	1958/4/20	エリザベス・サンダースホーム	聖母愛育院	
	黒い墓標—石炭産業合理化の断面	1961/12/17	失業者	三池	働く子供たち	1958/5/4	花売り	内職	
	組夫—石炭産業合理化の断面	1962/10/28	安全弁	建設協力会	大人にならない子供たち	1958/6/22			
鉱山	ある閉山—金属鉱山の現実	1963/8/25	宮城県栗駒郡	大土森鉱山	四人の山の子				
	水の上にくらす人たち	1958/6/15	隅田川	家船	不就学児童	1960/11/27			
貧困	この人達に愛の手を	1958/12/7	足立区本木町バタ屋街	スラム街	ぼくらは日本人	1961/3/12	エリザベス・サンダースホーム	花売りと靴磨きの少年	
	どん底人生	1959/7/19			我は海の子	1961/5/7	五島	因島	
	川に映った東京	1959/10/11	隅田川	失業	現代の子どもたち	1963/5/5	給食	野放し型	
	ある底辺	1960/7/31	釜ヶ崎		子どもの見た夏休み	1959/8/23	補習授業	夜店	
	繁栄の谷間—京浜工業地帯のある断面	1960/12/11	子安	中村地区	入会争議	1961/10/8	小繋部落(岩手県)	山梨県 北富士演習場	
	波止場	1961/7/2	横浜港	日雇労働者	山林地主	1961/6/4	熊本県小国	岩手県一戸町	
	釜ヶ崎からの報告	1962/5/20	西成	ドヤ	旧地主	1962/3/11	酒田市	松戸市	
	差別	部落	1958/4/27	関西	障害、貧困	土地はだれのもの	1963/3/3	富士吉田	東村山町農業・農村委員会
病気	日本の中の沖縄	1962/5/13	返還要求	県人会					
	マヒと闘う	1959/4/19							
	結核	1959/6/14	療養所	社会復帰					
	患者集団	1960/2/14	結核	療養所					
	小児マヒ地帯	1960/10/2	夕張	後志					
風土病	1962/1/21	片山病	牟婁病						
閉ざされた島—ライ療養所の記録	1962/3/18	長島愛生園							

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)	
農業・農村	D階層	1962/12/2	負債	標茶町
	産業開発青年隊	1959/1/11	次、三男問題	東北両中央隊
	万年豊作	1960/10/23	ヤミ米	農村問題
	豊作	1958/10/5	新発田	畑作農家
	牛乳	1958/9/7	牛乳値下げ運動	酪農民
	土の中の共同社会	1961/2/5	霞ヶ浦南岸	岩手県松尾村
	パイロット地区	1963/5/19		
	農協	1963/10/27		
	東京農民	1964/1/19	日野市	七生村
独自集団	日本人と次郎長	1958/1/5	ヤクザ	
	テキ屋	1959/4/26	零細商人	ヤクザ
	興行師	1963/9/22	プロレス	三波春夫ショー
	櫓太鼓のかげに	1958/1/12	相撲協会	高砂部屋
	村芝居	1958/8/24	どき回り	利根川べり
	修行	1959/6/7	大峰山	
	隠れキリシタン	1959/8/9	五島	平戸
	野丁場トビ	1962/11/4	建設労務者	墜落防止
	山岸会	1964/3/29	農業・農村共同化	実顕地
	県人会—東京に生きる地方精神	1961/12/3	新潟県人会	滋賀県租界
民俗	日本人の家	1960/5/1	白川郷	初島
	若者宿の人々	1960/7/3		
	迷信	1958/5/11	迷信の実態	民間療法
	恐山	1962/7/29	ヤマイオイ	ヒル
	水子塚	1962/11/11	加藤シヅエ	家族計画
慣行	市場	1959/7/12	神田青果市場	非合理的取引
	なわ張り	1962/4/1	芸能プロダクション	開業医
労働	一杯船主	1962/12/9	若松港	頼母子講
	季節労働者	1958/4/6	ニシン漁	材木伐採作業
	臨時労働者	1960/12/4	造船工場	地方公務員
	行商	1961/1/22	家庭配置業	ノコギリ行商
	埋もれた辺境—冬山の臨時労働者たち	1962/2/11	北秋田地方	国有林
	内職立国	1962/5/27		
	若い根っこ	1961/7/16	店員	住みこみ
	タクシー人生	1961/10/22	都心のタクシー	前近代的な労働条件
	飯場	1959/3/15		
	機関士—ある合理化の断面	1961/4/23	蒸気機関車	転換教育
	のれんと鉢巻	1959/9/13	中小企業	労働争議
	板ばさみ	1959/11/15	出版社	勤務評定
	セールスマン	1960/3/6	販売合戦	
	秘書	1961/3/5	議員秘書	秘書学校
	保母さん(1961/11/5)	1961/5/14	低賃金	豊島区福祉事務所
	白衣の労働者	1962/9/9	赤旗	

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)		
労働	職業病	1961/9/3	足尾銅山	水銀中毒	
	求人	1961/11/19	大阪	プレス工場	
	文化運動	1958/11/2	企業内文化活動	文京区の印刷工場	
伝統	職人—昔を守る人々	1959/1/4	しんこ細工	羅宇屋	
	まつり	1961/7/23	祇園祭	天神祭	
	伝統産業	1963/1/20			
	家元社会	1963/3/31	裏千家	池坊	
	文楽	1961/3/19	人形浄瑠璃	衰退	
	歌舞伎—その伝統と社会	1959/11/1	曲り角		
	祇園	1963/8/18	茶屋	置屋	
	神の国日本	1959/2/8	高千穂町	伊勢神宮	
	移民	移民	1958/2/9		
	移住者	1962/2/25	ドミニカ	バラグアイ	
災害	台風銀座	1958/8/31	枕崎		
	大津波	1960/5/29	大船渡	田老	
	雪害	1961/2/19			
	傷心の谷間—伊那谷その後	1962/4/22	天竜川	駒ヶ根市	
	災害日本	1959/9/6	台風	水害	
	泥海の町名古屋市南部の惨状	1959/10/4	水害		
	台風孤児	1959/12/13	伊勢湾台風	養護施設	
	社会矛盾	馬	1960/4/3	相馬の野馬追い	競馬場
アンバランス	1958/9/21	賃金差	都会集中現象		
競輪立国	1959/9/27	収益	存廃問題		
霊峰	1961/6/25	富士山	北富士演習場		
血液市場	1961/10/1	日本赤十字社	血液産業		
社会問題	精神衛生のカルテ	1961/6/11	精神衛生研究所	東京少年鑑別所	
	社会病質者の周辺	1963/12/29	病理		
	麻薬	1958/5/18			
	自動車ラッシュ	1958/6/29	道路	自動車工場	
	警察官	1958/10/12	ゆきすぎ問題	第5機動	
	満員	1959/3/8	結核療養所	自動車	
	在日外人	1959/4/12	外国軍隊	不良外人	
	路上の恐怖—交通事故	1959/7/26			
	交通マヒ	1961/1/8	交通事故	道路工事	
	ヘロイン	1961/1/29	麻薬取締官事務所		
	狂った速度計—ダンブカーの事故とその背景	1962/1/14	事故	下請	
	ゴミの社会学	1962/8/5	都市計画	ゴミ処理	
	行くえ不明	1963/3/10	搜索願	搜索体制	
	プライバシー	1963/4/14	宴のあと	人権擁護局	
	誘拐	1963/5/12	吉展	トニー谷	
	失われた歳月—長期裁判の代償	1963/7/14	吹田事件	昭和の岩窟王	
暴走	1964/4/5	交通事故	適性		

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)		分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)		
宗教	お寺様々	1958/3/16	高野山	比叡山	居住	土地飢饉	1960/1/10	住宅間	土地ブローカー	
	ある信者たち	1961/2/12	日光教	創価学会		貸家人対借家人—ある居住権をめぐる争い	1964/3/1	全国借地借家人同盟	中野坂上	
	創価学会	1962/7/8	富士宮	夕張	環境		水利権	1963/7/7	水利秩序	水争い
	仏像受難—文化財保護の反省	1962/7/22	仏像売却	新薬師寺		砂利飢饉	1964/2/2	多摩川	相模川	
	教祖誕生	1963/9/29	九州	善隣会		産業	玩具の季節	1957/12/22	輸出産業	内戦
	新興宗教をみる	1957/11/10	立正佼成会、世界救世教、PL教団、創価学会			絹	1958/8/3	生糸	蚕糸業	
女性	母と子	1958/10/19			日本政府専売品	1959/1/25	ショウノウ	塩		
	織屋と女工	1958/11/16			特許権—現代産業を支配するもの	1959/2/22	タレント	工業技術		
	この国の母たち	1960/7/17	社会進出	消費者	町工場	1961/12/10	江東地区	燕市		
	妻の座	1961/9/17	農家の妻	サラリーマンの妻	流通革命	1963/3/17	スーパー	小売店との対立		
戦後	生きている史蹟	1957/12/8	満蒙開拓義勇軍養成所	土浦海軍航空学校	海運	1963/7/28				
	引揚 14 年	1959/2/15	大開拓農場	行商	自由化 1 年	1963/9/1	貿易自由化			
	ある玉砕部隊の名簿	1959/5/31	レイテ戦線		技術	テレビ 現代のマンモス	1959/3/1	テレビ受像機	テレビの機能	
	右翼	1959/7/5	元血盟団	殉国青年隊		四角い鏡	1959/3/20	フィルム	ブラウン管	
	モンテンパへの追憶	1959/8/16	死刑囚	収容所		日本の空	1959/3/29	民間航空		
	孤独の島 "沖繩"	1959/12/6	コザ		エネルギー	原子炉の周辺	1963/2/10	東海村	原子力産業会議	
	黄色い手帳	1960/8/7	被爆者			教育	狭き門	1958/1/26	試験地獄	
	開拓地	1960/12/18	北海道	寒冷地帯	学校繁昌記		1958/5/25	各種学校		
	旧軍人	1961/2/26	水交会	偕行社	嵐の中の先生		1958/9/14			
	消えやらぬ傷痕	1961/8/6	広島	被爆	幼き受験生たち		1960/2/7	小学生	試験地獄	
	靖国神社	1961/11/26	遺骨収拾	戦没者	先生の雑記帳		1960/9/18	和歌山県西牟婁	炭焼き	
	旧軍港	1962/3/4	呉	佐世保	太陽のない教室—夜間中学生		1961/1/15	不就学児童	足立	
	傷夷軍人	1962/4/15	療養所	貧困	学習塾		1962/9/16	エスカレーター・コース		
	よみがえる墓標	1963/8/11	仙台第 2 師団	岩手県	人づくり		1962/10/14	一燈園	青雲塾	
	あの戦いの日々	1963/12/8	銃後	南方戦線	研究室		1963/2/24	東京大学	産学共同	
	地域開発	下水なき文化国家	1958/2/2	東京	都市の似非文化		修学旅行	1963/5/26	熱海	
		関門	1958/3/9	関門海峡	トンネル	無医村	1958/11/23	津軽	祈とう	
		工場誘致	1961/5/28	三重郡川越町	埼玉県岩井町	ドクター稼業	1961/8/13	セツルメント活動	鉄砲洲診療所	
		流転の村—小河内ダムの 30 年	1961/8/27	東京	清里村	ガン対策の周辺	1962/6/17			
破産都市		1962/6/24	福岡	田川	交通	国鉄ローカル線	1959/11/8			
秘境返上—国土総合開発の問題点		1962/8/19	国土総合開発計画	十津川	国鉄	1963/6/2	公共性	企業性		
夢のかけ橋		1963/4/21	本土四国架橋		私鉄	1963/9/15				
公民館		1964/3/8	南宇和郡	利根郡新治村	国鉄電車区	1963/12/22	田町電車区	事故		
都市		ガード下の東京	1958/6/1	秋葉原	御徒町	流行	浪花の芸人	1961/8/20	漫才	天王寺村
		大阪	1960/1/24			タレント市場	1962/8/12	芸能プロダクション		
	マンモス都市	1960/2/28	東京	人口問題	神風登山・谷川岳の記録	1958/7/13	登山熱			
	海拔 0 地帯	1961/9/24			文化	遺跡の周辺	1963/6/9			
居住	貸間あります	1957/11/24	賃貸者	赤羽引揚者寮	風俗	美人天国	1959/9/20	ミス・ユニバース	化粧品メーカー	
					売春防止法	1958/7/20	赤線地区	大阪		
				世相	三つの年の瀬	1957/12/15	諫早	大阪スラム街		

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)	
世相	犬の世相	1958/3/2	犬猫病院	
	よいどれ日本	1958/12/14	酒飲み天国	酔っぱらい 追放運動
	停車場人生模様—東京駅の24時間	1959/5/24	東京駅	
	古城落成—昭和築城時代	1959/6/28	郷土愛	築城ブーム
	もういくつねると—歳末の狂態とその裏側	1959/12/27	商魂	公益質屋
	競り合い経済学	1960/4/10	散髪屋	映画産業
	三行広告	1960/4/17	求人・求職	結婚相手
	群衆	1960/6/12	プロレス	安保闘争
	人気	1960/7/10	映画スター	プロ野球
	上野—裏窓の世相	1960/11/13	家出入	浮浪者
	なにわの暮	1960/12/25	病院スト	炭鉱離職者
	歌は世につれ	1961/4/9	橋幸夫	歌謡学院
	サラリーマン	1961/4/16	生活感覚	
	アマチュアスポーツ	1961/6/18	学生スポーツ	プロボクサー
	あるミスの誕生	1961/10/15	ミス東京	
	易	1962/2/4	トランプ占い	易者横丁
	アイデア	1962/2/18	アイデアの変遷	精神構造
奇禍	1962/10/7	運命	波紋	
消費	デパート	1961/3/26	消費ブーム	三越本店
	消費者主権	1963/6/30	主婦連	協同仕入れ
世代	定年	1958/7/6	職安	生存競争
	ハイティーン	1958/7/27	盛り場	湘南海岸
	全学連	1958/11/30	大学自治会	
	街の若者たち	1960/1/17	不良化	渋谷
	行動の世代—高校生の ある断面	1960/5/22	高校新聞	創価学会
	東京の大学生	1960/9/25	入社試験	駒場寮
	学生寮—大学における 人間性回復の方向	1961/5/21	国際基督教大学	京都大学
	老後	1963/2/17		
社会意識	勲章	1962/1/7	栄典制度	
	正義感をめぐる12 の証言	1962/4/29	水死	暴力
	教訓	1962/12/23	タンカー衝突	三河島事件
	道徳教室	1964/1/26		
序列	二軍人生	1959/11/22	天王寺村	二軍
	チャンピオン	1963/1/6	ボクシング	4回戦ボーイ
観光	観光日本	1958/4/13	海外からの 観光団	日本熱
	観光ブームの裏街道	1959/5/10	観光ブローカー	旅館あっせん業者
	レジャーの断面	1961/7/30	団体旅行	ドリームランド
	観光基地	1962/4/8	伊豆	和歌ノ浦

分類項目	『日本の素顔』サブタイトル	放送日	番組内容キーワード(2件)		
経済	兜町	1961/4/2	株式ブーム	水上生活者	
	株主	1961/12/24	投資ブーム	総会屋	
	経営戦略時代	1962/7/15	日本リサーチセンター	丸善石油学校	
	外国資本	1963/1/13	国際競争	外資提携	
	税関	1963/8/4	横浜税関	羽田空港	
	相場師	1963/9/8	小豆	赤いダイヤ	
政治	解散風の吹く国会	1958/3/30	国会内の動き		
	地方議会	1960/3/27	大阪	選挙違反	
	議長の椅子	1960/6/5	国会	歴代議長	
	9年間の記録—安保 から安保まで	1960/6/26	講和条約	自衛隊	
	政治テロ	1960/10/16	浅沼稲次郎	右翼	
	村の政治—4人の村 長の記録	1962/6/3	奈良県吉野郡天川村	岩手県九戸郡山形	
	選挙	1962/6/10	参議院選挙		
	三割自治	1963/1/27	統一地方選挙		
組織	地方議員	1963/3/24	広島県大野町	愛知県羽島市	
	警視庁	1962/1/28	国家警察と自治警察	二面性	
	捜査本部	1959/5/17			
	望楼—火災国日本の 現状	1962/12/16	自治体消防	消防団	
	後援会	1963/4/28	宝塚	画廊	
	年功序列	1963/6/16	官庁	八幡製鉄	
	企業学校	1964/3/15			
	軍事	三軍の装備	1958/2/16	自衛隊	御殿場の富士学校
		自衛隊	1959/12/20	保安隊	
		傷ついた村	1961/4/30	砂川基地	新島
防衛大学生		1961/7/9	起床ラッパ	銃の手入れ	
防衛産業		1962/5/6	名古屋	NEC	
15歳の自衛官		1963/11/17	少年工学校	炭鉱	
御蔵島		1964/2/9	射爆場候補地		
国際		二つのライン	1959/6/21	李ライン	華東ライン
	在日留学生	1963/4/7	国際学友会	新星学寮	
	国境周辺	1963/6/23	根室	コンプ	
総括	底流—日本の素顔 4年間の記録	1962/3/25	4年余	200数回	
	大陸派	1962/9/2			
	放浪	1963/11/24			
	灰色の海岸線	1964/2/16			

出典：NHK 提供資料より武田作成。